

持続的なまちづくりを支える人々のネットワーク—岐阜県恵那市岩村町を事例として—

岐阜大学 学生会員○石田大貴

岐阜大学 正会員 出村嘉史 高木朗義 倉内文孝

1. 研究背景および目的

持続可能なまちづくりを行っていくためには、地域住民間のつながりの存在が重要であると考えられる。しかし現在、我が国ではこれまで社会を支えてきた地域の「絆」が失われつつある。対象地域である岐阜県恵那市岩村町では、地縁的な活動である「縁日・祭り」など数多く行われている。また、城下町の町並みが今も遺されていることから、岩村町では地域の「絆」が大切にされていることが考えられる。

本研究では、持続可能なまちづくりを行うための基盤として、まちづくり活動を行う地域住民間のつながりに焦点を当てる。そして、岐阜県恵那市岩村町のまちづくり活動の母体としてのコミュニティを対象に、研究者自ら地域に入る参与観察でのフィールドワークを実施し、まちづくり活動を行う際、持続的に活動していくための構造を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の位置付け

本研究では、まちづくり活動における人のつながりに焦点を当てる。R. パットナムはソーシャルキャピタルという概念を用いて「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と定義している。我が国のソーシャルキャピタルの研究は、内閣府国民生活局¹⁾ (2003) が全国を対象にソーシャルキャピタルの定量的調査を行うなど、ソーシャルキャピタルに関する研究が行われるようになってきている。また埴淵ら²⁾ (2007) は、地域コミュニティの歴史とソーシャルキャピタルの関連性について論じるなど少ないながらもソーシャルキャピタルに関する実証研究も存在する。しかし、既往研究で用いられている手法では具体的に人のつながりを明確に表現することが難しい。

本研究では、ソーシャルキャピタルで表わされる人々の信頼関係および人々のつながりよりも、さらに具体的な場所と人のつながり・地縁による人々のつながりを構造的に把握するための視点を探るために参与観察を行い、観察結果から得た要点についてヒアリング・文献調査を行うものである。

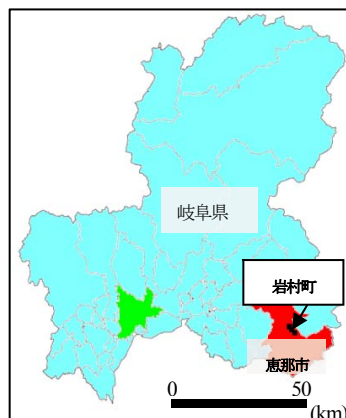


図1 研究対象地域



写真1 岩村城址



写真2 城下町

3. 岩村町概要

対象地区である岐阜県恵那市岩村町³⁾は、岐阜県の南東部に位置し、約800年余の永い歴史を秘めた町である。三万石の城下町として今も城山に石塁を遺し、当時の面影をとどめている。城下町には、国が重要伝統的建造物群保存地区に選定した歴史の町並みや旧跡も保存されている。

岩村町のまちづくり活動の例を挙げると、「恵那市岩村城を守る会⁴⁾」の清掃活動がある。この活動は、恵那市のシンボルである岩村城を後世に遺し、歴史ある城の維持保存を行うことを目的に、毎年行なわれている。城下町の町並みが今もなお遺されているのは持続的な地域住民の努力、地域住民間のつながりがあったからだと考えられる。

4. 視点の考察

本研究では、参与観察⁵⁾を2010年9月21日から10月23日の間実施した。参与観察により普段の人々の暮らし、場所における人相互のつながりの根底に何らかの構造を読むための視点を探った。

その結果、現状のイベントと組織の多さ、人々のネットワークの広さに焦点を当て、「岩村町内で年間多数行われるイベントが多数の組織を結ぶ接着剤のような役割を果たしている」という仮説を立てるに至った。さらに、これらを成り立たせる重要な要因として、消防団・無尽(頼母子講)という人のネットワークをつくるようなコミュニティがあることを把握した。ここでいう消防団とは、

市町村が消防本部とともに設置している消防機関の一つで、無尽とは、そもそも相互扶助を目的とした鎌倉時代に始まり、江戸時代に流行した組織である。参与観察を実施していく中で、まちづくり活動を行っている重要人物らは消防団及び商工会に参加していたことがわかった。しかし、商工会は町内で自営業を営んでいる人が参加するが、消防団は町内に住んでいる人なら参加することができることから町内でより大きなネットワークが存在すると考え消防団に焦点をあてることとした。また、無尽はまちづくり活動の参加に関わらず、岩村町の人々の間で浸透していることが把握でき、人のつながりに何らかの関連があると考えられることから、これら2種のコミュニティに焦点を当てる。

5. 人々のつながりを支えている2種のコミュニティ

岩村町における人々のつながりの根底にあると思われる消防団・無尽について把握するため、具体例に関するヒアリング、文献調査などから分析を行う。そして、それらがなぜこのような形となり、またどのように維持されてきたのか、また、いつからそのような形になったのかを明らかにする。

その際、消防団では、第1に団員の間でどのようなつながりがあるのか、第2に入団していた人がどのようにまちづくり活動に参加していたのか、第3に団員のつながりがどのようにして持続的なまちづくり活動につながっているのかを視点とする。また、無尽では、第1にどのような形に成り立ったのか、第2に岩村町においてなぜ現在も無尽が存在するのか、第3に現在行われている無尽はどのような形態なのかを視点とする。

(1)消防団について

消防団⁶⁾は、その構成員である消防団員は、他に本業を持ちながらも、権限と責任を有する非常勤特別職の地方公務員として、「自らの地域は自ら守る」という郷土愛護の精神に基づき、消防防災活動を行っている。

岩村町の消防団⁷⁾は、中山間地域であることなどの理由により消防活動だけでなく、防災組織としての活動が必要視されている。団員は住民を災害から守るため日々訓練を行い、災害があった場合に備えている。年間の約半数を消防団として活動をともししていることから、その人々の間につながりが存在することが考えられる。岩村町は、消防団の人材不足などの理由から、町内に仕事先がある男性は消防団に入るという伝統が存在する。また、消防団以外のまちづくり組織においても人材不足で

あることから、消防団に入団している人、入団していた人がまちづくり活動に参加していることがある。そのことから、岩村町において、消防団によって構築されたネットワークは岩村町の人々のネットワークを支える一つであることが考えられる。

(2)無尽について

研究対象地域である岩村では、無尽と呼ばれる金融の形態が現在も存在する。無尽⁸⁾は、戦前に営業を目的とした営業無尽が行われるようになり、事業者には脆弱または詐欺的経営、利用者に不利な契約をさせる者も多かった。また、掛金の延滞、担保物件の鑑査、裁判上の係争が頻出するようになり無尽は衰退していった。

岩村町では、現在も無尽というコミュニティが維持されていることから、無尽本来の相互扶助という目的が維持されてきたことが考えられる。現在岩村町に存在する無尽は、江戸時代にあったような金銭を融通するものというよりは、情報交換の場、親睦の場となっている。無尽の種類や参加している人によって、様々な会話が話されており、岩村町内における人々のネットワークや人間関係を構築する場となっていることが考えられる。このネットワークが、岩村町の持続的なまちづくりを支えてきた人々のネットワークの根底に存在する可能性が高い。

6. おわりに

本研究では、普段の人々の暮らし、場所における人相互のつながりの根底に何らかの構造を読むための視点を探るため参与観察を行った。その結果、消防団及び無尽が重要であることがわかった。今後、岩村町における人々のつながりの構造を明らかにすることで、今後のまちづくり活動を持続的に進めていく知見を得ることができる。

【謝辞】

本研究は、参与観察を進行する際、岩村町住民の方々・岩村町振興事務所の方々に多大なご協力をいただいた。ここに感謝の意を表す。

参考文献

- 1)内閣府国民生活局編 (2003) ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて、国立印刷局、東京
- 2)埴淵知哉ら (2007) ソーシャル・キャピタルと地域コミュニティの歴史：旧版地形図を利用した大規模アンケートの分析、GIS：理論と応用 = Theory and applications of GIS 15 (2), 59-70, 2007-12-30
- 3)岩村町役場 (1961) 岩村町史
- 4) 恵那市ホームページ, <http://www.city.ena.lg.jp/> 2010. 9/19
- 5) 京都大学東南アジア研究所編 (2006) 京大式フィールドワーク入門, NTT出版
- 6) 消防団ホームページ, <http://www.fdma.go.jp/syobodan/> 2010. 11/15
- 7)岐阜県恵那郡岩村町役場(1996), 広報いわむら縮刷版, 第一法規出版(株)東海支社
- 8) 山口麻太郎 (1935) 壹岐に於ける無盡 (頼母子講) の研究 (上) (下), 社会経済学会